

石破茂に危機の リーダーシップはあるか

山内昌之

(東京大学名誉教授/武威野大学客員教授)



1947年、札幌市生まれ。歴史家。専攻は比較政治史、国際関係史、中東地域研究。カイロ大学客員助教授、ハーバード大学客員研究員、東京大学大学院教授、明治大学特任教授などを経て現在、富士通FSC特別顧問、ムハンマド五世大学特別客員教授なども務める。紫綬褒章受章。司馬遼太郎賞、吉野作造賞、毎日出版文化賞(2回)、サントリー学芸賞などを受賞。「幕末維新に学ぶ現在」(中央公論新社)、「リーダーシップ 胆力と大局観」(新潮新書)、「中東国際関係史研究」(岩波書店)、「中東複合危機から第三次世界大戦へ」(PHP新書)、「大日本史」(佐藤優氏との共著、文春新書)など著書多数。最新著は「歴史を知る読書」(PHP新書)、「將軍の世紀」(上下、文藝春秋)など。

念願の首相の座を射止めた直後の総選挙で、きわめて厳しい結果を突き付けられた石破茂首相。まさに内憂外患の時代、難局を乗り越えられるのか。これからまさに「危機の宰相」としての真価が問われる

石破茂とソクラテスを襲った悲劇

九月二十七日、五度目の自民党総裁選に挑んで勝利を収めた石破茂氏であったが、十月二十七日に投票票された衆議院選挙で自民党は大敗を喫した。無論、選挙に踏み切ったのは自身の判断ではあったが、石破氏の苦しみかと思いを馳せるとき、私が唐突に思い出したのが、紀元前四世紀のソクラテスの悲劇であった。

ソクラテスは七十歳のころに「アテナイが信じる神々

とは異なる神々を崇め、若者を墮落させた」という罪で告発されて有罪に問われる。友人のクリトンからは逃亡するよう勧められたが、それを拒否し、判決に従ってみずから毒杯をおおって命を落とした。石破氏の心中を察すれば、念願の総理総裁の座を射止め、彼なりの抱負をこれから実現しようとした最中、解散総選挙での大敗という「悲劇」に見舞われたことになる。

ソクラテスが毒杯をおおったのは、たんに有罪を宣告されたからではない。彼の存在と主張そのものが告発されたことにショックを受けたからだ。ソクラテスはアテナイの若者たちを墮落させた罪で糾弾されたが、石破氏は今回若者からの支持を得られなかった。未来の社会を担う人びとの多くが投票したのは、自民党でも立憲民主党でもなく国民民主党だったのである。もともとこの党も選挙後、党首玉木雄一郎氏の思わざる蹉跌によって、支持層の一部を失望させることになるが、保守政治家を自認する石破氏にとっては、きわめて厳しい選挙結果だったことに変わりはない。

今回の選挙の特徴はどこにあったのか。自民党の敗北は石破氏の個人的な営みではなく、彼が代表する組織が懲罰を受けるに値すると判断され、総裁として責任を問

われた点にあった。自民党単独はもとより公明党と合わせた議席数でも過半数を確保できなかったほど、有権者の怒りは大きかった。石破氏からすれば、じつに厳しい運命を認定された心境ではなからうか。

十一月十一日の首班指名では、じつに三十年ぶりの決選投票を経て石破氏が首相に指名された。少数与党にとって政権運営の道のりが困難を極めることは容易に想像できる。

今後、石破氏が辿る道を考えて、それは「政治家としての死」につながるのかもしれないが、来年(二〇二五年)の参議院選挙を見据えて総理総裁を辞職する悪夢も、まんざら一部議員の想像だけではないかもしれない。しかし、私は直ちにその必要があるとは考えていない。自民党が依然として第一党であるという事実に鑑みれば、石破氏自身も自分の身を捧げる決断は内心でもいまは下していないはずだ。その意味では、先の衆院選は今後の政局をどちらにも転ばせうる、微妙とも絶妙とも言える結果に終わったと総括できる。

衆院選の結果を見るに、日本の有権者は急激な変化が生じて日本政治が不安定化したり、あるいは日本の外交安全保障がすこぶる国際的に動揺したりすることは望ん



衆議院選挙後に会見に臨む石破茂首相(2024年10月27日撮影、写真提供:AFP=時事)

でない。読売新聞社が十月二十八日と二十九日の両日に実施した世論調査では、「首相は辞任するべきだと思うか」との問いで、「思わない」が五六%で「思う」の二九%を大きく上回っている事実が示す意味は小さくない。そしてこれが、石破氏がソクラテスのように淡々と判決を受け入れなかった背景でもある。日本はある意味ではじつに興味深い政局を迎えており、石破氏が己の使命に虚心に向かい合えば、局面を打開する余地は残されているというのが私の理解である。

たしかに自民党は、国民の要求や期待に応えきれなかった報いとして選挙に敗北した。しかし、その責任のすべてを石破氏個人が負うべきかと言えば、そうとは言えない。もちろん、政党政治家としては責任をとるべきだという考えもあるが、各種の世論調査は現時点では究極の選択を突き付けているわけではない。

微妙とも絶妙とも言える政局の行方

とはいえ、石破政権がじつに厳しい局面を迎えている事実には変わりない。イスラーム教では、神の審判を受ける信仰者は天国へと続く火獄の真上にかけられた「ス

イラストの橋」を渡ると考えられている。この橋は髪の毛ほどもない細さで剣よりも鋭く、嘘偽りを言ったり悪事を働いたりしたことがなければ渡りきれぬ。あえて比喩的に言えば、石破氏はまさにこれから「スライートの橋」を渡らなければいけない。渡り切れるのか、あるいは落ちてしまうのか、非常にきわどい状況と言えよう。

私が思うのは、いずれにせよ石破氏一人の力では渡りきることができない、ということだ。与党内で求心力を高める必要があるのは当然として、自民党一強体制が崩れたいまでは、他党の協力なくしては議会政治を運営できない。

やはり読売新聞社が十月二十八日・二十九日に行なった世論調査では、「自民党中心の政権の継続」が四二%で、「野党中心の政権に交代」の四〇%をわずかで差があるが上回っている。少数与党の政権運営について古今東西の例に鑑みれば、これまでとは異なる連立政権、あるいは「部分連合」「閣外協力」で解決されるケースが多い。そう考えたとき、キャステイニングポートを握るのが玉木代表率いる国民民主党であることは論を俟たない。同党がどのような動きをとるかはこの先から見えてくるだろうが、石破氏にとっては「スライートの橋」を渡るう

えでの条件を満たすファクターになりうることは事実である。

そこでいま、玉木氏が歩み寄りの条件として突き付けている論点が、所得税に関わる「一〇三万円の壁」の引上げである。現在、基礎控除と給与所得控除を合わせた金額が一〇三万円を超える国民に所得税が課せられる仕組みだが、石破氏は自民党税制調査会や財務省と調整して、国民民主党の案とのあいだに妥協点を見出せるだろうか。「年収の壁」はほかに「二〇六万円の壁」「一三〇万円の壁」があるが、いずれにせよ「壁」の引上げは、とくに地方自治体の税収減をもたらす。玉木氏の考えと折り合いをつけるのは容易ではないばかりでなく、玉木氏も財源の見直しをつけなくてはならない。

もちろん、玉木氏も政党の党首として「一〇〇%の勝利」をめざしてはいないだろう。「一〇三万円の壁」については一七八万円まで引き上げることが主張しているが、同時に妥協点を探っているはずだ。また、ガソリン税を一部軽減する「トリガー条項」を巡っては、自民党と政策ごとの協議をすることで合意した国民民主党が、条項の凍結解除を求めている。「一〇三万円の壁」の引上げも含め、あくまでも国民の生活レベルの問題を強調

して論陣を張っているわけだ。そう考えれば、主張と方向性は非常に明瞭と言える。

しかし、それは裏を返せば、自民党からすれば憲法改正問題や日米安保問題など、政党としての基本的立脚点を否定しかねないテーマに踏み込んでくる相手ではないことを意味する。政治改革については、自民党も衆院選大敗の反省から、慎重な物言いではあるが、見直す方向のようだ。石破氏は政党から政治家個人に支出され使途が公開されてこなかった「政策活動費」を廃止する方針だという。国会議員一人当たり月額一〇〇万円支給される「調査研究広報滞在費」（旧文書通信交通滞在費）も透明性を図ると明言している。これらは国民民主党の方針とも合致しているから、両党の歩みよりは不可能ではないだろうし、石破氏はここに打開点を見出さざるを得ないはずだ。

政治とカネの問題については、ともすれば「大した問題ではない」という声も聞こえてくるが、国民の信託を得て、物心両面から国民の幸福を実現するのが政治家の使命だと言うのであれば、やはり不信を招く振る舞いは慎まねばならない。古今東西、政治が混沌する契機多くは、政治とカネの問題なのだ。いわゆる「裏金」が表向けるわけにもいかないから、やはり非常に難しい判断を迫られる。自治体の収収減と国民所得の増進との折合いをどうつけるかあたりに、野田立憲民主党ならではの知恵の出どころがあるのではないか。

想起される戦前の「護憲三派内閣」

事程左様に政局が流動的な時代を迎えたわけだが、あえて近現代の日本政治史を参照するならば、戦前の日本が対象となる。衆院選の結果、私たちの目の前には与野党伯仲の状況が生まれたが、これに対して一九二〇年代の「護憲三派内閣」成立後に三党が鼎立した状況を想起する読者もいるかもしれない。百年前の日本は約三年をかけて二大政党制に移行する一方、政党間の泥仕合の様相は深まっていった。

護憲三派とはすなわち、第二次護憲運動を起こした立憲政友会・憲政会・革新倶楽部の三政党のことで、一九二四年に各党の党首である高橋是清・加藤高明・犬養毅が会合した際に成立した。翌年に革新倶楽部が政友会に吸収され、また第一次加藤高明内閣の辞職を経て消滅したが、彼らが問題視したのは清浦奎吾内閣であった。

に出てしまったのだから、自民党はこれ以上の悪あがきをするべきではない。他方で、政治にカネが必要なのは事実であり、問われるべきはあくまで透明性だ。たとえば国民民主党は立憲民主党とは異なり、企業・団体献金の禁止には慎重な姿勢をこれまで示してきた。現実的な落としどころを模索しながら、国民の納得感を得るための議論は避けられないとは石破氏も重々承知しているはずだし、ここでも国民民主党の現実感覚はそれなりに評価されて然るべきだ。

国民民主党と比較して、立憲民主党はじつのところ難しい状況に置かれている。なぜならば、原発の問題や東アジアの安全保障を巡って中国に対してどのように対応するか、あるいはトランプ大統領時代の日米関係など、確実に党内不和を促すイシューが存在するからだ。

同党の野田佳彦代表は非常に合理的かつ現実的な政治家として期待できると私も見ているが、国民民主党を自民党から引き離そうとするならば、党内不一致の状況が足かせになる。あるいは、国民民主党が掲げる「一〇三万円の壁」の引上げや「トリガー条項」の凍結解除などについて、もしも自民党と国民民主党が合意した場合に、立憲民主党だけ国民生活にプラスになる政策に背を

清浦内閣は議会・政党の意志に制約されずに行動する「超然内閣」との批判を受けており、憲法も無視しがちで「超然」たるスタンスをとっていた。

それに対する反発として、護憲三派が政党政治の回復と普通選挙法の施行をめざして連合したのだが、あえてこの構図に当てはめたい人びとにとっては、現在の自民党は清浦内閣に、立憲民主党と国民民主党、そして日本維新の会が護憲三派ということになる。しかし私は、さすがに現在の自民党がああ清浦内閣ほど批判されるべきとは思わない。いま護憲三派内閣を想起するのであれば、かつて与野党が伯仲して、政治的妥協を試みなければ政局が混迷をきわめた反省の教訓として参照されるべきだろう。

あるいは、公明党が憲政の本道に戻り、三派の側に回るといふ政界の大きな組み換えも、理屈の上ではあり得ない話ではない。実際、公明党は今回、当時の石井啓一代表が小選挙区で落選するという手痛いパンシシュメント（処罰）を食らっている。

本来、公明党とは、清廉で腐敗から遠い立ち位置を最後の拠り所として、世の中で日々地道かつ真面目に暮らす人びとにアピールする政党だった。いざ選挙になれば

フル回転で活動する創価学会女性部員などの多くは、普通の暮らしを送っている人びとである。しかし今回、公明党はじつに三五人も「裏金疑惑議員」を推薦しており、そのなかには自民党さえも公認を見送った候補者もいた。地道に日々働く公明党支持者は、こうした推薦をはたして納得していたのだろうか。石井氏はその煽りを受けたのではないか。

ただし、公明党は長いこと与党に参画（さんかく）して、振り舞いも与党感覚になっていて、現在のポジションで得られる利益は大きい。新代表に就任した斉藤鉄夫氏は本来の公明党のイメージに合う清廉なタイプで、おそらくある程度は地味ながら党勢を立て直してくると思う。裏を返せば、与野党の組み換えといった大きな戦略転換に舵（かじ）を切る人物ではないだろう。

そう考えれば、今後の論点として浮上するのは、やはり立憲民主党と国民民主党、日本維新の会がどのような関係を構築するのか、すなわち現野党の再編成が起るか否か（いな）ということになる。

自民党であれば、さまざまな政治社会思想やバックグラウンドの議員が存在しているが、憲法改正と日米安保の重視という二つの基軸においてまとまっている。しか
準で選ばれたのだろうか。当人たちは内外の難局に少しでも向かい合う覚悟ができていたのだろうか。人材難なのか、当選回数（とうせんかいすう）のトコロテン方式なのか、石破氏にはぜひ聞いてみたい。この人事も自身の理念や信念の一部だというのであれば、そのときにはいよいよ戦前の三派連合のような動きが出てきても不思議はない。

話はやや飛ぶが、ここで私が思い出すのがアル・ハリリーによる中世アラブ文学の古典『マカーマート』の一節である。これは十二世紀以来、中東の知識階層（ちゆうとうのちしきかいそう）にとっては『コーラン』に並ぶ必読の書とされてきた。それを読むと、現代の政治を不思議と照射しているかのよう
に思える記述も少なくない。私は折に触れて堀内勝氏の訳注による東洋文庫版（全三巻）を読んでいて、あらためて繙（ひもと）くと、石破内閣誕生をどう解釈するかについて、参考となる文章も見受けられる。

たとえば、「彼（かれ）とともに在りせば 我が煩（わづら）い事も消え時の幸運（ゆきあ）来たりてその顔を頭（あたま）わさん きらめきわたる光たずさえつつ」という記述である。その裾（すそ）にすがりついても石破氏の才覚（さいかく）を評価し、党内野党として不遇（ふぐう）をかこってきた仲間が、ようやく光り輝く表舞台に立ちこ
れまでの憂鬱（ゆううつ）を忘れようとしている様を示しているかの

し、三党が何がしかの軸を共有できるかは不透明であるのみならず、そもそも最大野党である立憲民主党が内実は基本的立脚点（りつてい）で一致していない。これこそが日本政治の「すつきりしない」点であり続けていることに野田新代表は心を致してほしい。

石破内閣の組閣への違和感

他方で、政治家としての石破氏をどう評価すればよいかと考えると、現時点ではなかなか見えてこない部分が多い。たとえば、当初は「アジア版NATO」などを掲げていたが、いまではすっかりと消えてしまった。率直に言えば、選挙後の政局やトランプ氏当選への対応に追われているからか、どの政策にどれだけ本気なのかがまだ不明瞭である。

だが、私が疑問を感じたのは閣僚の顔ぶれである。明らかに総裁選の論功行賞（ろんこうこうしょう）で選ばれた人間が重要ポストを占めていて、この点については厳しい見方をせざるを得ない。これ以上に絶望的なほど酷いのは、政務官人事である。政見や政策を語ることを選挙での当選以来聞いたこともないような芸能界出身の議員たちは、どういう基
ようだ。いまでも昔も、どのリーダーにつくかで自分の一生が決まるのは、政治の世界だけではなく、およそ集団の論理が働く世界では共通している。

「光たずさえつつ」とは、先の総裁選で石破氏を推薦した二〇人のうち、入閣した六人にとってはとくにそうだったに違いない。しかしそれにしても、これほど明確に論功行賞と言われても仕方のない人事をした点は従来の組閣と比べて異彩（いさい）を放（はな）つている。派閥を解消したいま、派閥人事ではないと石破氏は言うだろうが、しかし一〇〇人近い旧安倍派の議員は一人も入閣せず、党役員にさえ就いていない。これは逆説的に、派閥の論理を知っているからこそ、報復（ほうふく）という名の「総理派閥」の人事を躊躇（ためら）いなくできたのだろう。

あるいは「もし時の運 我に背向けなば ああ願わくば 我（あ）や我が子（こ）らを 辛（つら）き浮世（うきよ）より 去（か）らしめん 子（こ）らのみ亡（な）せて 我（あ）が身（み）生（な）残（のこ）らわば 苦（く）痛（いた）みと呵（か）責（せき）の 念（ねん）にさ
いなまれ 身（み）の置（お）き所（ところ）を いかにせん」という記述にも
出（で）くわす。ここからは、石破氏に敗（やぶ）れた高市（たかいち）早苗（ななほ）氏（うぢ）や小
林（こばやし）鷹（たか）之（ゆき）氏（うぢ）を思い起こす。

とくに第一次投票でもっとも票を集めた高市氏にとつては、今回の総裁選は残酷（ざんこく）な結果であった。政治では一

寸先は闇とはよく言ったものである。それでも、政治の世界に限らず、リーダーたる者はみずからが負けても、部下や弟子たちの処遇に対しては心を砕かなければいけない。自分だけが大臣や党役員に就いて、同志を無役の冷や飯に放置してはならないというのも一見識である。高市氏や小林氏が同志たちの入閣と引き換えに自身は無役であることを望んだのであれば、それは苛烈な権力闘争のなかで筋を通した一つの見識というものだろう。

幕末になぜ「新しい日本」をつくれたのか

いずれにしても、現在が世界的に危機の時代であることは間違いない。政局が混乱し続ける事態はあってはならない。いま一国の宰相に求められるのは危機のリーダーシップだが、石破氏ははたしてそれを備えているだろうか。

そこで私が思いを致すのが「運」にかかわる問いかけにほかならない。もちろん、世の中のすべてが運で決まるとは思わない。しかし政治家にとっては、その手で運をつかみとる力強さも必要ではないか。すなわち、危機

構成したうえで、あくまでも上院が拒否権をもつ仕組みを考えていた。つまり、言うなれば上院の議長兼大統領として自分が政治舞台に残って日本を再編成するというのが慶喜の謀計であったが、それでは「新しい日本」をつくることはできないと政治的に見抜いたのが、西郷や大久保たちの考えであった。だからこそあくまでも「討幕」に執着し、慶喜と幕府側の目論見を軍事的に打ち破っていた。

もちろん、幕府や慶喜にも彼らなりの信念があったことは客観的に語られるべきだが、それはひとまず措く。西郷らが發揮した大局観、あるいは未来を俯瞰する力は、同じく危機の時代である令和初期のいま、あらためて注目しなければいけない。

そして、私は西郷と大久保以外でもう一人、非常に大きな役割を担った人物に着目したい。朝廷というきわめて大きな権限をもつ要素を押さえていた、下級公家出身の岩倉具視である。先ほど、石破氏は一人では「スイライトの橋」を渡ることはできないと指摘した。その点、幕末においては、軍事戦略観と部隊運用能力をもつ西郷、封建制度を廃して新国家を構想する政策立案力と権謀術策をもつ大久保、そして朝廷という旧国家の土台

に直面しているとは、ある意味では悪運や悲運への遭遇かもしれないが、事態を好転させて「幸運」に切り替えるだけの才覚や胆力も試されているということだ。それが少しでも成功するのなら、人びとは「運も実力のうち」と言うのである。

ふたたび歴史を振り返り、わが国における転換期を参照するならば、やはり幕末から明治にかけての時代が思い浮かぶ。慶応三年（一八六七）十月の大政奉還に始まり、十二月の王政復古の大号令、翌年一月の鳥羽・伏見の戦い、そして三月の江戸無血開城までのあいだで、日本という国が分裂したり吹き飛んだりしてもおかしくはなかった。しかし、日本は結果として、一つにまとまることのできたのである。その要因を考えると、いまの日本人でも主義や思想によって好き嫌いはあるかもしれないが、やはり薩摩・長州・土佐という外様系の三藩が果たした政治的役割はきわめて大きかった。とくにその主役であり、主力だったのは薩摩藩であり、さらに言えば西郷隆盛と大久保利通であった。

当時、將軍・徳川慶喜は大政奉還後も政権への返り咲きを狙っていて、徳川家を頂点とした有力諸侯や主要公家が言わば上院でまとなり、下院を各藩の家老クラスでを大瓦解させた岩倉の三人が、共通の政局観をもちながら任務分担して動くという絶妙なパートナーシップを發揮したことで、新国家への礎が築かれた。そして、日本はその後、「坂の上の雲」に向かって駆け上がっていくことになる。

幕末という時代は、日本の周辺に諸外国の艦隊が出現するなど、国家の命運がどちらに転ぶかわからない時代であった。しかし、西郷らはそんな時代に生きたことを悲運や悪運に終わらせず、幸運へと変えて志を成し遂げてみせた。

議会制民主主義の時代では、なおさら一人だけで任を果たすことは難しい。あるいは、地球的課題に直面しているいま、一国だけでそれを解決することは不可能である。その意味では、国内外で然るべきパートナーシップを構築することこそが、危機の時代の指導者に求められるリーダーシップと言える。

はたして石破氏は、この任にどう挑戦するのだろうか。アメリカではドナルド・トランプ氏が大統領にカムバックするが、二人ははたしてどのような関係性を築くのだろうか。石破氏が危機の宰相として真価が問われるのは、まさにこれからである。